

鐵 鋼 分 析

铁与钢 第60卷 第13号 1974

75.251
756

鉄と鋼

第 60 年 第 13 号 昭和 49 年 11 月

目 次

« 特集号・鉄鋼分析 »

「分析特集号」発刊にあたつて.....	1727
展 観	
鉄鋼分析に想う.....	池野 輝夫...1729
隨 想	
工業分析と日本学術振興会第 19 委員会.....	宗宮 尚行...1734
鉄鋼分析化学の 30 余年.....	後藤 秀弘...1737
部会活動報告	
日本鉄鋼協会の研究活動.....	1740
鉄鋼分析部会.....	池野 輝夫・福原 章男...1741
化学分析分科会.....	新見 敬古...1744
発光分光分析分科会.....	井樋田 隆・河島 礦志...1752
螢光 X 線分析分科会.....	川村 和郎...1760
鋼中非金属介在物分析分科会.....	成田 貴一...1763
鉄鋼基礎共同研究会個体質量分析部会.....	須藤恵美子...1767
鉄鋼標準試料委員会.....	池野 輝夫・大槻 孝...1768
技 術 資 料	
鉄鋼の化学分析.....	若松 茂雄...1778
鉄鋼の原子吸光分析.....	遠藤 芳秀・中原 悠紀...1787
鉄鋼の発光分光分析.....	川村 和郎・森田 矩夫...1795
螢光 X 線分析による鉄鋼分析.....	望月 平一...1799
鉄鋼のガス分析.....	須藤恵美子・斎藤 守正...1805
鋼中の非金属介在物および析出物の観察、同定および抽出分離定量法.....	成田 貴一...1820
新しい手法による状態分析.....	広川吉之助...1827
鉄鋼分析の自動化.....	松本龍太郎...1843
分析・分離・公害.....	品川 駿明...1854
JIS 規格体系.....	神森 大彦...1862
論 文	
第 4 級アンモニウム塩の鉄鋼中微量ガリウムおよびゲルマニウム定量への応用.....	針間矢宜一・大路 博信・小田島賢治...1869
鍛鉄のカントバック分析における異常放電とその分析値におよぼす影響.....	成田 貴一・松村 哲夫・徳田 利幸・諸岡 錠平・野々村英造...1879
ガラスピード法による酸化物試料のけい光 X 線分析.....	川村 和郎・渡部 弘・内田 庄男・小口 春雄...1882
鉄鉱石中の鉄分の螢光 X 線分析.....	白岩 俊男・藤野 允克・原田 武男...1900
半導体検出器を用いた螢光 X 線分析.....	白岩 俊男・藤野 允克・小田 泰雄・山中 和夫...1910
螢光 X 線分析法の鋼中非金属介在物分析への適用に関する基礎的検討.....	成田 貴一・原 寛・宮本 酒・山本浩太郎・五藤 武...1920
フェロアロイの水素分析における試料調製の影響.....	井樋田 隆・土田 正治...1930
鋼中希土類元素硫化物の分析化学的調査.....	川村 和郎・渡辺 四郎・鈴木 節雄...1935
鋼中ホウ素の状態別分析法の研究.....	川村 和郎・大坪 孝至・古川 洋...1944
オーステナイト系ステンレス鋼中のチタン炭化物の定量.....	石井 照明・井樋田 隆...1957
鋼中炭化物の抽出ならびに定量法に関する研究.....	就由 貴一・宮本 酒・岩切 治久...1962



- イオンマイクロアナライザーとその鉄鋼材料研究への応用 松本龍太郎・佐藤 公隆・鈴木 堅市...1980
 イオンマイクロアナライザーの鉄鋼分析への応用 角山 浩三・大橋 善治・鈴木 敏子・鶴岡 一夫...1989
 発光分光分析による鋼中アルミニウムの形態別分析法の研究 小野寺政昭・佐伯 正夫
 西坂 孝一・坂田 忠義・小野 淳一・福井 黙・今村 直樹...2002
 鋼中酸化アルミニウムの存在形について 本多 文洋・広川吉之助...2013
 自動化学分析による鋼中リンおよびホウ素分析 川村 和郎・大坪 孝至・古川 洋...2018
 分析溶液試料自動調整装置の開発と鉄鋼分析への適用 川村 和郎・渡辺 俊雄・森田 矢夫...2027
 自動吸光光度分析装置の開発 田口 勇・小野 昭経・松本龍太郎...2035
 三塩化チタン還元、有機指示薬判定法による鉄鋼石中の全鉄定量方法 佐伯 正夫・西坂 孝一・岩本 元繁・安達 晃...2045
 排水中の微量油分定量法 松本龍太郎・田口 勇・石黒 忠...2056

分析への注文

- 極限を追求するために 渡辺 俊雄・森田 矢夫...1786
 特殊分析の精度向上と分析作業の自動化を望む 堀川 一男...1853
 残された水溜もきれいに掃除して下さい 郡司 好喜...1861
 最も真値に近いと推定される標準値を決定してある標準試料 平野 四蔵...1919
 分析者への指針 渡辺 十郎...1961
 過程分析の必要性 丹羽貴知藏...1979
 分析研究の立場 菊野 五郎...2001
 分析研究者への提言 三木本貢治...2012
 製鋼炉内溶鋼中炭素の連続自動分析法の開発を望む 下川 義雄...2017
 急冷スラグの光電子スペクトル測定による状態分析 伊東 威安・後藤 和弘...2062

- 抄録 2064, 資料室により 2074, 会告 N206
 日本鉄鋼協会記事 N208, 日本鉄鋼標準資料案内 N212
 正誤表 2063, 「鉄と鋼」寄稿規程改訂のお知らせ N228

日本鉄鋼協会編集委員会

委員長 松下 幸雄

運営委員会

委員	青山 芳正	荒木 秀	安藤 卓雄	岩越 忠和	加藤 健三
	鍋木 俊郎	川合 保治	草川 隆次	郡司 好喜	佐藤 忠雄
	田村 今男	高橋 愛和	中川 龍一	中村 正久	長島 晋一
	橋口 隆吉	藤元 克己			

和文会誌分科会

主査	松下 幸雄	荒木 泰治	荒木 透	安藤 卓雄	石川英次郎
委員	赤松 泰輔	内山 郁	江島 杉夫	大西 敬三	大西 英明
	岩村 貞光	鍋木 俊郎	川合 保治	川村 和郎	木下 修司
	加藤 健三	佐野 信雄	神馬 敏	鈴木 正敏	相馬 駿和
	郡司 好喜	田村 今男	高橋 愛和	中川 龍一	中村 正久
	田中 良平	西田 信直	宮下 芳雄	山岸 秀久	吉谷 勝
	中村 泰				

◎ 編集発行者 社団法人日本鉄鋼協会 / 100 東京都千代田区大手町1-9-4

"Tetsu-to-Hagane"

Vol. 60, No. 13, November, 1974

Contents

« Special Issue on Iron-Steel Analysis »

Review

- An Expectation for Iron and Steel Analysis.....Teruo IKENO...1729

- ForewordTakayuki SÔMIYA...1734, Hidehiro GOTO...1737

Report of the Joint Research Society of The Iron and Steel Institute of Japan

- Report of the Iron and Steel Analysis CommitteeT. IKENO and A. FUKUHARA...1741
Report of the Chemical Analysis Subcommittee.....K. NIIMI...1744
Report of the Photoelectric Emission Spectrochemical Analysis Subcommittee
.....M. IHIDA and I. KAWASHIMA...1752
Report of the Fluorescent X-Ray Analysis SubcommitteeK. KAWAMURA...1760
Report of the Nonmetallic Inclusion Analysis SubcommitteeK. NARITA...1763
Report of the Solid Massspectrometric Analysis Committee.....E. SUDO...1767
Report of the Committee on Iron and Steel Standard Samples
for Analysis.....T. IKENO and T. OOTSUKI...1768

Technical Review

- Chemical Analysis of Iron and Steel.....Shigeo WAKAMATSU...1778
Atomic Absorption Spectrochemical Analysis for Iron and Steel
.....Yoshihide ENDO and Yuki NAKAHARA...1787
Emission Spectrochemical Analysis of Iron and Steel
.....Kazuo KAWAMURA and Norio MORITA...1795
X-Ray Fluorescence Analysis of Iron and Steel.....Heiichi MOCHIZUKI...1799
Gas Analysis of Iron and Steel.....Emiko SUDO and Morimasa SAITO...1805
On Observation, Indentification, and Determination of Nonmetallic
Inclusion and Precipitate in Steel.....Kiichi NARITA...1820
New Physical Methods in State Analysis.....Kichinosuke HIROKAWA...1827
Automation of Analysis of Iron and Steel.....Ryutaro MATSUMOTO...1843
Analysis-Separation Ecological Pollution.....Mutsuaki SHINAGAWA...1854
JIS System of Analytical Methods for Iron an Steel Industry.....Ohiko KAMMORI...1862

Technical Papers

- Application to Analysis of Microamounts of Gallium and Germanium
in Steel by Using Quaternary Ammonium Salts
.....S. HARIMAYA, H. OJI, and K. ODASHIMA...1869
An Unusual Discharge Phenomenon and Its Effect on Pig Iron
Analysis by Vacuum Emission Spectrometry
.....K. NARITA, T. MATSUMURA, T. TOKUDA, R. MOROOKA, and E. NONOMURA...1879
The X-Ray Fluorescence Analysis of Oxide Materials by the Glass
Bead Sample Technique.....K. KAWAMURA, H. WATANABE, T. UCHIDA, and H. KOUCHI...1892
Fluorescent X-Ray Analysis of Iron Content in Iron Ores
.....T. SHIRAIWA, N. FUJINO, and T. HARADA...1900
X-Ray Fluorescence Analysis with Si (Li) Semiconductor Detector
.....T. SHIRAIWA, N. FUJINO, Y. ODA, and K. YAMANAKA...1910

31617

A Fundamental Study of Fluorescent X-Ray Analysis for Analysis of Non-metallic Inclusions in Steel	
.....K. NARITA, H. HARA, A. MIYAMOTO, K. YAMAMOTO, and T. GOTO...1926	
Preparation of Sample for the Determination of Hydrogen in Ferroalloys	
.....M. IRIKI and S. TSUCHIDA...1930	
Analytical Chemical Investigation of Sulfide of Rare Earth Elements in Steel.....K. KAWAMURA, S. WATANABE, and T. SUZUKI...1935	
Study on Phase Analysis of Boron in Steel.....K. KAWAMURA, T. OTSUBO, and T. FURUKAWA...1944	
Analysis of Titanium Carbide in Austenite Stainless Steel	
.....T. ISHII and M. IRIKI...1957	
Fundamental Study on Isolation and Determination of Carbides in Steel.....K. NARITA, H. HARA, A. Miyamoto, and H. IWAKI...1962	
An Ion Microprobe Mass Analyzer and Its Application to Iron and Steel Research.....R. MATSUMOTO, K. SATO, and K. Suzuki...1980	
Application of Ion Microprobe Mass Analysis of Iron and Steel.....K. TSUNOYAMA, Y. OHASHI, T. SUZUKI, and K. TSURUOKA...1989	
Investigation on the Metallographic Analysis of Small Amount of Aluminium in Steel by Emission Spectroscopic Analysis.....M. ONODERA, M. SAEKI, K. NISHIZAWA, T. SAKATA, J. ONO, I. FUKUI, and N. IMAMURA...2002	
Infrared Spectroscopic Study of Al Oxides in Al-killed Steel.....F. HONDA and K. HIROKAWA...2013	
Automatic Chemical Analysis of Phosphorus and Boron in Steel.....K. KAWAMURA, T. OTSUBO, and T. FURUKAWA...2018	
The Development of an Automatic Apparatus for Dissolving Samples and Its Applications to the Analysis of Steels.....K. KAWAMURA, T. WATANABE, and N. MORITA...2027	
Development of an Automatic Photometric Analyzer.....I. TAGUCHI, A. ONO, and R. MATSUMOTO...2035	
Determination of Total Iron in Iron Ores by Titanium Trichloride Reduction-Organic Redox Indicator Method.....M. SAEKI, K. NISHIZAKA, M. IWAMOTO, and A. ADACHI...2045	
Determination of Small Amounts of Oil in Waste Water.....R. MATSUMOTO, I. TAGUCHI, and T. ISHIKAWA...2056	
<hr/>	
Abstracts.....2064, Library News.....2074,	
Japanese Standard Samples of Iron and Steel.....N212	

Overseas membership: Annual charges: ¥4500 (incl. postage) Initiation fee: ¥450

© The Iron and Steel Institute of Japan, 1974

「分析特集号」発刊にあたつて

本誌「鉄と鋼」が特定のテーマのもとに特集を行なうようになつてから、4年近くを経過し、今までに7回の特集号を発行している。そして、その間テーマは、鉄鋼の製造ならびに研究の分野を、製銑、製鋼、加工、性質、周辺技術などに大別すれば、すでにそのすべての部門を網羅し、一部の分野では2回にもわたり採りあげられている。このような時期になつて初めて鉄鋼分析に関する特集を行なうのは、鉄鋼の製造、研究における分析の重要性を考慮するとき、いささか遅きに失したとの誹りを免がれないかも知れない。

けれど、なんといつても分析はその技術が、鉄鋼の主流をなす製銑、製鋼、加工などの技術とは、異質な面を多分に持つているため、鉄鋼の製造、研究のほとんどすべての分野と密接、不可分の関係にありながら、技術的な面での交流の場が少なく、孤立していたともいえる状態にあつた。とかく分析技術者は内に籠りがちであり、他の分野の技術者、研究者からは敬遠されがちであつたとみるのは、単にわれわれの偏見ばかりでなく、歴史的な事実であつたと思う。近年、分析内外の情勢が変化し、この傾向は大いに改善されたとはいえ、まだ、孤立のイメージは完全には払拭されていない。このことは鉄鋼協会の会員の構成比からも窺がえると思う。会員のうち分析関係者はごくわずかで、ここでも少数派である。分析特集号を発行する意図は、特集号企画の当初からもつていたもの、上述のような従来の経緯からみて、おそらくそれが、大多数の分析関係以外の会員には興味も関心も薄いであろうことを考慮すると、慎重たらざるを得なかつたのである。

しかしながら、分析と他の分野の技術者、研究者間の相互理解の促進が、今日こそ緊要な課題であるとの視点に立てば、この問題に対応するためには「鉄と鋼」における分析特集が最も適している。また、これに重点をおくとすれば、分析という狭い専門領域の偏狭と独善に陥ることが避けられ、分析関係以外の会員の興味と関心を喚起し、広く全会員に役立てることができ、分析特集号をより一層意義あるものとすることができると思われる。このような考え方たに到達したことが、今回分析特集号をおくればせながらも、発行に踏みきらせた理由の一つであつた。

ともかく、今回その機が熟し分析特集号を発行する運びとなつたことは、「鉄と鋼」にとつても60年の歴史を顧みるとき画期的なことであり、われわれ分析に従事するものにとつても、喜びこれに勝るものはない。ただ、たまたま、その編集の任にあたる巡りあわせとなり、現在は喜びよりも責任の重さを痛感している。この記念すべき分析特集号の編集者として、われわれはかならずしも適任とは思えず、この大任が成功裡に果せるか否か疑問なしとしないが、なにはともあれ一同最善の努力を傾ける以外方

法はないとの決意のもとに、なん回かの討議をつくした末、つぎのような編集方針をたてた。

1. 鉄鋼関係の分析の学問と技術の最先端を紹介し、分析技術者、研究者に有益な情報を提供する。同時に論文以外の記事では、他の分野の技術者、研究者をも対象とし、これらの人々にも興味をもつて読まれ、分析に理解と关心をいだいてもらえるよう配慮する。

2. 従来オープンでないためあまり一般には知られていない、鉄鋼協会の事業の一つである鉄鋼関係の分析の研究機関の組織とその活動状況を紹介する。現在この分析研究機関は日本における組織的な研究の中心的存在であり、その研究成果は最先端を示すものであるといつて過言ではないと思う。その成果が鉄鋼以外の一般分析技術者にも十分利用され、研究機関の活動がさらに評価されることが必要である。この意味から本特集ではこの紹介をも重点の一つとする。

3. 分析関係の先輩および他部門の技術者、研究者から、現在の鉄鋼分析あるいは分析技術者に対する注文、意見、感想などを、なるべく数多く寄せてもらい、分析関係者の反省の資とし、相互理解に役だたせる。

このような方針を十分、かつ満足な状態で具体化するためには、われわれ編集担当者はあまりに非力であつたが、幸い宗宮、後藤両先生はじめ、分析関係各研究機関ならびに第一線の技術者、研究者各位の御賛同、御協力をえ、論文、技術資料、その他合せて50余編の寄稿をみ、質量ともに予期以上の特集号を組むことができた。

御賛同、御協力を賜わつた各位に深甚なる謝意を表するとともに、この特集号が今後の鉄鋼分析の学問と技術の発展の契機となり、さらに、分析と関連各部門の相互理解促進の一助となることを念じている。

編集委員 川村和郎

須藤恵美子

成田貴一

広川吉之助

若松茂雄

展望

UDC 543:669.1

鉄鋼分析に想う*

池野輝夫**

An Expectation for Iron and Steel Analysis

Teruo IKENO

1. はじめに

今回会誌『鉄と鋼』にて鉄鋼分析特集号が発行されるることは本誌として始めての企画と聞いておりますが、鉄鋼分析関係者にとって日頃の努力を会員諸氏にご理解いただく機会を与えられたことは誠にご同慶に堪えない所であります。今日の日本の鉄鋼業の隆盛をより返つて見るとき鉄鋼分析技術はわが国の鉄鋼業を支える技術の中で極めて地味な技術の部類に入りますが、その発展の歴史は鉄鋼業の発展の歴史と不即不離の関係にあつて鉄鋼の生産量や品種が増大し新しい鉄鋼技術が開発されるに伴つて分析方法の迅速化や分析精度の向上、分析適用範囲の拡大を促し、反面分析技術の進歩によって新たな鋼種を拡大し材料の研究を促しあるいは新しい生産管理体制の確立に寄与するなど幅広い生長を遂げてきたのであります。またこの間にあって鉄鋼分析技術の長足の進歩が鉄鋼と関連ある種々の分野、時には一見無関係と思われる分野までの分析技術の発展に貢献している例は数多く知られている所であります。この機会に鉄鋼分析技術のこれまでの進歩の跡を顧みこれを取りまとめておくことは分析技術が典型的な積み上げの技術史であれば、将来の新しい方向づけにも参考になり特集号の意義は一層深いものになると思います。

環境問題から始つて、石油に大きく依存する産業エネルギー問題、さらには資源の問題など多くの重要かつ困難な問題が、戦後の日本を立ち直らせここまで成長してきた日本経済の行く手ははつきりした姿で浮上してまいつた中にあつて、今日ほど企業の社会的責任が論議される時代は過去には余りなかつたと思います。その意味では今日の産業界は第2次産業革命とも言える状況にあるといつても過言ではないと思います。高度の生産性の追求によって生じた種々の歪を是正し、社会活動と一体化し、社会の福祉に寄与することが企業の本来あるべき姿だと思います。鉄鋼業にたずさわる技術者としては快適

な生活環境の保持の技術確立を達成し、ますます大型化し近代化する種々の鋼構造物に必要な良質の安全性の高い鋼材を安定して供給することこそ我々の責任でなければなりません。それはより濃密なより高度の分析技術の確立が要求されることは言うまでもなく、鉄鋼分析技術者の一層の自覚が求められ従来よりももつと広範囲の活動が期待されるゆえんであります。

多量の資源を外国より輸入し加工製品を外国は輸出しなければならない日本にとって前述の課題は単に国内だけのものではなく海外にもそのまま当てはまることがあります。日本の鉄鋼技術、鉄鋼製品が世界で信頼されてこそ調和された国際化時代に適応できるでしょう。すでに活発な活動の推進されている国際標準化機構 (ISO, International Organization for Standardization) の各技術分野の中で鉄鉱石は日本がその幹事国を引受けている唯一つの分野であり、鉄鉱石のサンプリング・化学分析・物理試験・粒度試験の各部門で日本が積極的な活動を行ない関係各国より評価されていることは良く知られている所であります。同じ国際標準化機構の中にある鉄鋼の分野でも日本が関係諸国と密接な協力を取らながら化学分析を始め多くの作業部会で活躍していることが日本の鉄鋼技術を認識してもらう上で大いに役立つことは当然でしょう。私が鉄鋼分析技術者に常日頃広い視野と世界に通用する技術の開発をお願いする理由もここにあります。

2. 鉄鋼分析技術発展の歴史を追つて

鉄鋼の5元素の分析と言う言葉で理解される時代は戦前から昭和25年頃までを指し、分析法で言えばすべて重量法・容量法がその主流をなしていた時代であります

* 昭和49年2月21日受付（依頼展望）

** 日本鉄鋼協会共同研究会鉄鋼分析部会部会長
日本鉄鋼協会鉄鋼標準試料委員会委員長
新日本製鐵(株) 製品技術研究所 理博

す、もちろん高炉も日産 500~1000t、転炉はなく 100t 前後の平炉が鋼の主要生産設備であつた時代のことです。特にこれといった分析装置もなくひとえに分析工といわれる人達の経験と熟練によつて C, Si, Mn, P, S の 5 元素が分析された時代で、現在の技術内容と対比して見るとあらためて 20 年の技術の進歩のすばらしさに目を見張るばかりであります、ここに見落してはならない大事なことがあります。それは今日の鉄鋼分析技術の進歩をもたらし世界に誇り得る技術を築き上げた人達がこの頃より育ち始めてきたことであつましよ、その重要性はいつも口にはされながら、ややもすると鉄鋼技術の片隅に置き忘れられない分析技術を自ら体験してその問題点を掘んだ人や分析技術の学問的な掘り下げる必要性を認識した人によつて鉄鋼分析発展のための新しい土壤が作られ始めた大事な時と言ふことが出来ます。

鉄鋼分析が急速にその力をつけていつた時代がこの後に続く 10 年間と言つていいことがあります。磨薄板の連続冷間圧延設備が新しく日本に導入されて冷延鋼板の研究が盛んに行なわれる一方で、平炉の酸素富化吹鍊が採用され始められますと、鉄鋼分析もいわゆるトランプエレメント(微量元素)の分析や迅速分析の要求の声が大きくなつてきました。この局面に新しい分析機器として最初に登場するのが光電比色計・分光光電度計であり、全くこれなくしてはこの時代の鉄鋼分析は語れぬほどです。ほとんどの元素が 0.01% 近くの微量分有率まで分析ができるようになり、これまでの技術では数時間、時には 1 ~ 2 日かかつたものが數十分で分析出来るようになりました。この進展には日本学術振興会製鋼第 19 委員会第 1 分科会(分析)の活動が大きくあづかつたことを見逃すことはできません。この分科会を通じて示された関係諸大学の先生達の指導と新しいテーマをいち早く検討し、その研究成果を互いに発表し話し合つて進められた鉄鋼各社の協力が大きな成果を産んだと言えるでしょう。产学協同の一形態を明確に形どつた時期であります。この時の研究成果をまとめた学振鉄鋼迅速分析法をひも解いて見る時、当時の分析目標時間が 15 分以内であつたのを考えると今日の実状とは隔世の感があるにおどろかされます。

第 3 の時期は昭和 35 年頃より始まつたいわゆる機器分析時代であります。この時期になりますと生産性向上のため、高能率の鉄鋼生産設備がどんどん建設され生産量が飛躍的に増えて行き世界でも有数の鉄鋼生産国になつていくわけです。転炉も導入され始め伊前分析の迅速化はいよいよ必要となり手操作による化学分析では到底間

に合わないこととなりました。この解決策として真空発光分光分析装置、螢光 X 線分析装置が導入され、併せて分析要員の合理化も行なわれることになつたわけですが、私はこの時に鉄鋼分析技術者が短時間にしかも完全なまでに成し遂げたこれらの新しい分析装置の鉄鋼製造作業への密着と分析技術面からのバックアップは大いに評価されなければならないと思います。これら装置の導入に先がけて関係規査団が歐米に参つておりますが、その数年後には日本における機器分析の華々しい活動状況を多くの外国人が見学していることからしてもいかに日本の鉄鋼分析の技術がこの時期に大きく伸びたか首肯して戴けるものと考えます。この機器分析態勢の確立がなければ日本の鉄鋼業がここまで伸びられたかは疑しい所であります。これを成し得たのも先に述べました第一期より有能な人材が育つてきていることによるものであります。大学の先生方の指導もさることながら彼ら自身の勉強と苦労によって成し遂げられたことは特筆さるべきであります。この機器分析態勢の確立により生産現場の分析技術の中心は化学分析より機器分析へと移行し機器による分析処理率は現在 85% 以上にも達している状況であります。より迅速により精度よくとの不断の努力が続けられた結果今日の機器分析が初期の頃のそれとは大きく変わっているのは言うまでもありません。

この機器分析の進歩に刺繡されて從来の化学分析の分野に著しい変化の現われてきた時期が昭和 40 年頃からであります。伊前分析の主役の座こそ機器分析に譲つたものの化学分析の必要性・重要性は決して減少せず、機器分析がなし得ない新しい分析範囲の開拓、機器分析との比較で浮き上ってきた從来の化学分析の内蔵している問題点の解決、本質的に相対的測定法に頼らざるを得ない機器分析のためにより正確な標準値の提供など新しい要求が発生してまいりました。『車の両輪の如く』とよく言われますが、この時期は丁度化学分析と機器分析が車の両輪の如く発展して今日の確固たる鉄鋼分析の基盤を作つたと言つても過言ではないでしょう。原子吸光分析装置、ガスクロマトグラフ、電気化学的分析装置の導入・開発が盛んに行なわれ化学分析の能率や精度は飛躍的に增大いたしました。この時期の化学分析の進歩の特長は言い方を換えれば化学分析の機器化が著しく進んだと言うことができます。しかもその指向の中に從来の化学分析がいくつかの分離操作の上に成り立つていたものを、可能な限り目的元素の化学的分離を行わずにそのままの状態で直接分析したいという考え方方が大きく出現してまいりました。これはより微量の領域に入ると或いは同属元素の共存が多くなると化学的分離の誤差が看過

し得なくなることと操作の簡略化を図つたことに外なりませんが、この時の成績が後述の溶液の自動分析法の発展に連がつてくるわけです。昭和40年頃より始まつた数年間に進歩した化学分析により鋼のC, S, Nなどの分析がそれぞれ数 ppm のオーダーの微量までも分析出来るようになつたことを前述のいわゆる鉄鋼5元素時代と比較して見るとその進歩は驚くばかりです。さらにこの時期の化学分析の進歩につけ加えておかなければならることは新しい化学分析装置が鉄鋼分析技術者とメーカーとの共同研究により日本で作られるという一つのパターンができてきました。このような創造的な力をつけてきた分析技術がさらにそれぞれ関連分野で独自の大きい力を發揮するようになつてくることは想像に難くありません。

つぎに私は昭和40年前後からの同時期に一つの体系にまで発展した析出分散相の分析いわゆる状態分析の功績を決して忘れることはできません。種々の苛酷な使用条件に耐えうる高強度鋼材開発の要望に応えて析出硬化型高張力鋼の研究が盛んに行なわれたのもこの時期であり研究に析出分散相の分析がどんなに必要であつたかは今更言うまでもないことあります。析出分散相の分析はそれまでの鋼中非金属介在物分析の経験をベースにしてでき上つた化学分析の一つの発展ではありますが、鋼中析出微粒子の同定・構成・分散状況・抽出分離・各構成成分別分離分析・各粒度別分離分析等々利用し得るあらゆる情報と利用し得るあらゆる技術の活用・組合せから生れてきた新しい分析分野でありその意味では化学分析でも機器分析でもありません。この新分野での研究に大いに力を発揮したのがエレクトロンプローブマイクロアナライザ(EPMA)や高出力のX線回折装置などの導入がありました。従来の非金属介在物の分析が平均値というマクロの意味でしか論じられなかつたのに対し1ミクロンというミクロの観点からの分析情報が加わり、格子常数の精密な測定によって固溶体の組成比まで分つてまいりました。このようなきめ細かい分析は器用な日本人に向いているのでしょうか、この分野での日本の鉄鋼分析技術者の研究はすばらしいものがありました。析出分散相の分析技術が確立されて行くにしたがつて熱処理でおこる鋼中の反応が化学的に鮮明に理解できるようになりました。この結果あらためて鋼の材質の研究がきめ細かく行えるようになり、種々の新鋼種が生れて来たのも当然のことあります。この分析技術はさらに鉄鋼生産工程の各部署で診断的な調査を可能にし種々の作業処理の改善や管理システムの開発に役立つたわけあります。

この数年間非常に進歩して来た分析分野の一つに環境管理分析があります。鉄鋼分析の中でこの分野の比重が過去の発展の歴史を振り返って見る時残念ながら低かったことは否定出来ませんが、始めにもふれた様に快適な環境それも製鉄所や工場内だけでなくその広い地域社会を含めて良好な生活環境を保持する技術を確立して行く過程で分析のしめる役割はまさに大きいと言わねばなりません。あらゆる状況を考慮した上でいつも適用できるサンプリング・分析となると分析化学的には大変難しい問題であるわけですが、これまで蓄積されて来た鉄鋼分析技術者のポテンシャルはこれらの問題を積極的に効率的に解決しつつあり、日本学術振興会製鋼第19委員会第1分科会の中に設けられた環境分析小委員会や各地での共同研究機関での活動がそれをはつきりと物語っています。単なる分析だけに止らず連続分析、自動分析のためのセンサーの開発や有害物質を使用しない新しい分析法の研究、さらには無害処理技術の検討にまで分析技術者の努力が注がれつつあることも理解さるべきであります。

以上長々と鉄鋼分析の歴史を追つて私の思いつくままを述べてまいりましたが、どの分析分野の発展も現在決して停滞したり消滅しているわけではなく新しい限界の壁に向つて、さらに専門的な深い掘下げや幅広い活用を狙つてそれぞれの方向に向つて伸びております。鉄鋼分析が従来のイメージより脱皮して鉄鋼の基礎科学の領域にまで成長しつつあることはまさに心強い限りであります。日本鉄鋼業発展のためにも鉄鋼分析技術の発展を心から願うものであります。

3. 鉄鋼分析技術者の体質にふれて

鉄鋼分析技術を他の鉄鋼技術と比較して見ると、その特質の一つとしてはたとえ競争激化の企業間にあっても共通の場で討論し、結論を出してそれに従わないと独りよがりとなり誰もが認めるものとはなりません。共通の場としては日本鉄鋼協会に鉄鋼分析部会があり、そのほかにも日本学術振興会製鋼第19委員会第一分科会や同ガス分析協議会や日本鉄鋼連盟の各委員会およびいろいろの研究会がありますが、いずれの場でも研究成果の発表があり、その成果を標準化することが真摯に続けられております。また分析とは不可分の標準試験の作製・提供に関して日本鉄鋼協会にある標準試料委員会が不即不離の関係で存在し活動していることも良く知られている所であります。上記の諸会のメンバーは学識経験者、企業の専門家、関係官庁、鉄鋼協会、鉄鋼連盟の方々で構成されておりますが、私の特に申し上げたいのはチームワ

ークが極めてよく各種委員会・分科会の横の連絡也非常にスムーズであることあります。

私はここに鉄鋼分析技術者の本質の一端を見る思いがします。このことから考えてみると分析 (analysis) という技術は文字通り物質を分解しそれを構成する化学的要素に分けるという性格上、具象的な生産物を持ちません。生産するものといえばパーセントで表わされる単なる数字のみであり、しかもそれが出現してきた過程を証明する材料が無ければ、全く信用の上に成り立っているものと言わねばなりません。鉄鋼分析技術者が信用されなければもうそこには分析は無いのも当然であります。この意味では分析技術者には山師や策略家がいないのは当然で、几帳面な眞面目な人達ばかりであり、自分達の立場を理解し合い協力し合うことが極めて自然にでき上つたものでしよう。

しかし、反面から言えば常に受身でのごとを受け止め自分の専門性の中に閉じ籠りがちな本質を持つた人々であるとの批判があつたとしても完全にこれを否定することもできますまい。私は鉄鋼分析の進歩がもたらした前述の分析技術者に期待される重要な役割りのことを思うと、敢えてこの機会に私の望んでいることを申し上げてみたいであります。

これから分析技術者は実に多くのことを学ばなければならないでしよう。昭和35年頃までのいわゆる学振迅速分析法時代では分析技術者といえば分析化学を専攻した人達がその主流を占めていました。しかしその後に続く機器分析時代に入ると電気、物理を専攻された人達も従事されることが多くなり、このことは学問的に関係する領域が広くなつたことを示すものであります。さらに新しい分析分野として析出分散相の分析が進んでくると、金属組織学や冶金学的な知識を相当必要とするようになりました。これから分析技術者がこれまでの受身一辺倒の分析から本当のニーズに適合した分析を行なうことができるようになるためには、上述の各領域にわたる広い知識を持ち深い理解の上に立つて他の部門の鉄鋼技術者と協力したり共同で仕事が進められるようになることが大事であらうと思います。そうなれば分析値に疑義が生じた時に單に『再分析して見ましよう』だけでもつと有効な問題解決策があるように私には思えてなりません。

機器分析が非常に進歩した結果、分析値は分析技術者の技術レベルに左右される部分が少なくなり、その意味では“主観的”な判断結果が“客観的”になつたという言い方もできるでしよう。ボタンを押すだけでタイプで打ち出されてくる分析値は誰が行なつても同じような数

値を打出し、その数値こそ間違いのない眞の値のように思われて行くのは大変恐しいことである。大した苦勞もなしに得られるデーター程、粗略に取り扱われ、その数値の持つ意味も理解されずに使用されることが多いものです。機械装置というものはその機能が常に正しく標準化され、設定されている条件内でのみ正しいアウトプットを対応的に提供するものであります。条件の変化があつた場合や機能の限界を越えている場合には唯機械的に信号を送り返しているに過ぎないものです。環境問題を契機にして各方面で分析値が多く測定され議論されていますが、誤った結論・対策にならないよう分析技術者が自覺すると同時に、分析データーを利用する他の分野の技術者を理解せしめることが分析技術者の責任であります。

機器分析の進歩を喜ぶ反面今一つ私の気になる点があります。それはあまりにも便利になり過ぎたために化学反応を知らない分析技術者になつてしまわないかということです。機器分析の欠陥は相対分析法であり、標準試料がなければ分析できません。標準値を決定するためにには化学量論的の反応に基づく絶対測定法が必要であることは言うまでもありません。物質を分離して化学反応を追求する能力こそ分析技術者の最も得意とする所であらねばなりません。私は今こそ新しい武器を使って各工程・過程で起る化学変化を徹底的に洗いざらして貰い度いものだと思つてます。この章の最初の部分で私は分析技術者は分析化学以外の多くの関係分野を勉強しなければならないと申し上げましたが、これはあくまで現在の鉄鋼分析の持つている力をさらに大きくするのに必要であると言うことを力説したのであって、化学変化の究明を忘れた分析技術者はその本分を見失いつつある人のように私には思えてならないのです。

各大学の分析化学教室の研究内容も最近は大きく変りつつあるようにうかがつております。鉄鋼分析が発展したかつての時代のように分析化学研究室で専攻された人がすぐ分析技術者として指導的な活動をされた時とは異り、各関係個所で数少ない人材を育成して行かなければならぬのは大変なことだと思いますが、矢張り最終的な成果を挙げるには人間であり、鉄鋼分析技術者の有能なそして逞しい後継者を育てて行くことが一番大事なことであります。鉄鋼分析の分野はほとんど無機化学であつて華々しい有機化学の分野ほど広くありません。戦後有機化学の目覚ましい発展に伴なつて化学に興味を持つ者は有機化学に走り、どの産業部門も無機分析の後継者の養成には苦慮している状況にあつて、地味な分野の活動は現代の若者には向かないのかとしみじみ考える

次第です。

4. おわりに

鉄鋼分析技術者のなし得たこれまでの業績はまことに立派なものであり、限られた紙面ではその努力の実体と業績の全体を述べることはできませんでしたが、私なりに日頃の人達に寄せる気持らの一端を述べさせて戴いたことを大変嬉しく思います。私の危惧する所が杞憂に終り、期待する以上のことが成し遂げられることを心より望んでいます。

これからも鉄鋼分析技術はもつと発展して行くでしょう。極微量分析が可能になり今よりも一桁も二桁も微量の元素の影響が研究され新しい性質を持つた鉄鋼製品が

生れてくるかも知れません。極く微細な析出粒子まで抽出分離し同定できるようになれば、もつと鋼の性質がわかるようになるでしょうし、結晶粒界や結晶構造の差による化学反応の変化まで分析できるようになれば、それこそ今の我々には見たことのないような鉄鋼製品ができるかも知れません。分析機器が余りにも発展すると全く生産設備の一部になつて無人分析になるととも決して夢ではないでしょう。新しいセンサーが開発されれば居ながらにして環境管理の多次元的情報が集められるようになるでしょう。こう書いていても次から次へと夢はふくらむばかりです。鉄鋼分析技術者の御健闘を期待いたしますと存じます。

隨想

UDC 543: 669.1

工業分析と日本学術振興会第19委員会

宗 宮 尚 行*

学振製鋼第19委員会は昭和9年12月に創立され、その研究目的は、鋼材に生ずる各種の欠点の発生状態を明らかにし、発生原因を調査して研究し、その防止対策を研究し実験して製鋼技術の進歩をはかり、よりすぐれた鋼材を生産し、国の基幹産業を急速に進歩発展させるにあつた。調査や研究は広汎に亘り、原材料から製品に至る迄の全工程全作業に亘つていた。

委員会は委員長俵国一博士の卓越した見識によつて設立され、各分野の権威ある委員により構成された廣度協同の総合研究委員会で、金属特に鉄鋼の専門学者や技術者を柱とし、これに基盤科学、応用科学の各分野より多数の研究者、技術者が参加し、一体となつて研究を遂行したのである。私も設立以来微力ながら今日まで関与してきました。第3代委員長沢村宏博士は第2代委員長田中清治博士のあとを継ぎ、俵委員長の築かれた委員会を益々発展させ、昭和34年に学振第19委員会25年小史に活動状況をまとめ書かれた。

委員会は俵博士の傑出した指導力と包容力、論理的研究精神によつて育成された学振独特の研究精神をもつ、学振風が生れ、学振法の略称ができる広く用いられるに至つた。

博士は委員会を畢生の仕事として力を尽くされ、各委員には温情をもつて接せられ、並々ならぬ熱意をかたむけて指導された。また名委員も献身的協力をなし、委員会はますますアクチブになり、大きな成果をあげ今日に至らしめたのである。終戦直後は委員長や多数の委員が罹災し物資は欠乏し、国民党は敗戦の結果壊滅状態となり、極めて苦難な國状であったが、委員会は引継いで開かれ、研究を繼續して復興にそなえた。昭和21年には迅速分析法第2版を刊行したのである。

委員会は学理と実証に重きをおき、また常に基礎を重視して奨励した。委員会の研究目的達成に分科会協議会などいわゆるワーキング・グループ(W-G)を設置し緊急課題には直ちに着手するなど、わが国における委員会のあり方に範となるパターンを実際に示した。委員会

の趣旨により化学分析を基本的に重要と考え、最初のW-Gとして昭和10年に第1分科会(分析)を設置し、ついで同11年に第2分科会(測温)、同14年に第3分科会(溶解、造塊)が本委員会のほかに設置され、その後委員会には今日迄に二つの分科会と五つの協議会を設置した。また第1分科会(分析)は、戦後、分光分析(26年)、ガス分析(28年)の二つの協議会、水素定量(46年)、環境分析(46年)の二つの小委員会を設置した。

われわれの仕事はチーム・ワークにより共通の場において集団思考することが多く、その規模は数人のものから大きな国際的のものまでさまざまである。その機能を十分に發揮し、業績をあげる上に、メンバーはすぐれた独創的発想に常に心掛け、これを尊重し、リーダーは自己研修に力を注ぎ、幅広い見識を身につけ、全員の意見をよくまとめてチームの目的を達成することが肝要である。第19委員会は常にこの観点に立つて運営されてきたのである。

水素、酸素、窒素分析に關係あることとして第19委員会発足当時、特に緊急な研究課題が、白点発生の防止であった。よつて白点の本性を明らかにし、水素が最も關係深いことを確かめ、工場における白点発生防止について重要な指針の數々を与え、大きな業績をあげたのである。

第1分科会(分析)は真空加熱方法による鋼中水素分析方法を確立(昭13.10.8決定)した。今日もなお学振法として広く他の金属分析にも利用されている。引き続き鋼中の酸素につき真空融解方法、窒素の化学分析方法、非金属介在物分析方法などを確立した。これらの学振法もまた広く指導的役割を果して今日に至っている。現場作業に直結した問題の一端として省力化、迅速化に14 MeV高連中性子酸素分析計や濃淡電池起電力測定を研究し現場で使用している。第1分科(分析)は前に述べた鉄鋼ガス分析協議会(昭和28年)と水素分析小委員会(昭和46年)を設置し、これら三元素の分析方

* 東京大学名誉教授 日本国士院会員 工博

法を時代の要請に即応すべく、ます水素から更新改定しつつある。水素については更に進んで水素の関与する鋼材の破壊現象などに関連する分析、存在状態など materials characterization のごとき観点からも研究課題とされることであろう。

試料採取並びに調製法は重要な問題で、その研究実験にはいろいろの大きな困難が伴なうのである。第一分科における分析方法の研究開発が進み、特に水素、酸素などのガス成分分析方法が整うにつれて、精錬過程における鋼浴溶鋼ガス成分定量の正確な試料採取調製方法が重要な課題になり、第1と第3分科会委員よりなる合同のガス分析協議会に小委員会が設けられ、従来採用されている4方法の特性を慎重に比較検討し改善した。また日鋼室蘭製作所小林委員たちは、現場で炉内に直接浸漬し、吸引する真空採取方法（水素定量にも準用しうる方法）を研究開発し、内外に誇るにたるすぐれた成果をえた。これら一連の実験は現場の平炉における画期的研究であり、大規模のものであつた。この研究は委員会における重要な業績の一つであつて、製鋼に寄与することが極めて大である。委員各位のそがれた熱意と協力に自ずから頭が下がり感概無量のものがあつた。

なお第1分科会（分析）においては、終戦直後新しい試みとして、現代統計学を用いる合理的なサンプリング方法が研究され、焼結鉱に応用された。その後この方法は急速に発展して鉱石類、燃料などに広く普及し、従来より合理的になり、格段の進歩をみたのであつて、わが国は各國の先端に立っていると思われる。

微量（100ppm以下）成分分析、超微量（1ppm以下）成分分析については試料採取、調製、前処理等あらゆる点に注意し、器具、薬品、貯蔵などによる汚染や試験の損失など特別の注意が必要であつて、多くの困難な問題がある新しい分野である。

第1分科会（分析）は委員長俵博士が主査として、並ならぬ熱意を傾けて指導された。第1分科会（分析）のような大きな組織と長い歴史を有し、鉄鋼分析に顕著な成果をあげて貢献しているこの様な総合研究会は内外にその類をみないと思われる。この分科会では各委員はまず広く文献情報をを集め、各自関係の作業所の分析方法や技術を持ちより、理論並びに現場の観点から検討しあい、共同実験を積み重ねて決定し、更に情勢に適うよう更新し、常に権威あらしめた。かくして全国工場の技術水準を一様に、かつ急速に向上させ、時勢に即応すべく努力したのである。

今日迄に第1分科会（分析）に提出された分析研究報告6000、決定した学振分析方法300、まとめて公表し

た刊行書23、内訳は試料採取調製法1、水素、酸素、窒素の分析方法3、迅速分析方法6、鉄鋼化学分析全書（26年版）2、同新版（38年）10である。いずれも学界業界に高く評価され広く利用されている。特に鉄鋼化学分析全書（新版）は10巻3000頁、技術の進歩、研究業績の成果に基づき、新時代の要求に答えて、権威ある委員を中心となり、88名の専門家が執筆されたもので、現場分析に、また研究に類のない充実した指導書として活用されている。これらの分析方法はいずれも学振法として広く用いられ、国や学協会などの規格分析方法、またその作成に役立つている。

迅速分析法は委員会発足数年後の昭和16年頃、良質の鋼材を多量生産するには、製鋼過程においては、刻々に変化する溶鋼溶滓の成分を速く定量し、作業を調節しなければならぬ。分析所要時間は1分でも短いほど好ましい。化学的方法も平炉の場合、当時においては、少なくとも数分から15分以内で結果がえられなければ目的に添わぬ。したがつて溶鋼溶滓をはじめ原材料の分析そのほか鉄鋼製造工程の管理に、かつ能率の増進に必要な現場分析を、所要の精度で短時間にて行いうる迅速分析方法の研究開発を促進することになったのである。

第1分科会（分析）は凡ての委員はいずれも現場の分析担当者の熱心な協力をえて、極めて迅速に研究開発することができた。これらの決定した方法は、学振法として昭和17年より同41年迄5回に亘り、鉄鋼迅速分析法を刊行することができ、なお現在も継続刊行の予定である。わが国の製鐵製鋼工業は学振法を採用することにより、鉄鋼生産は質と量共に格段の進歩を遂げたのである。この様に第19委員会は多大の貢献をしたのみでなく、日本の鉄鋼分析技術の水準を高め、現場の分析技術者が育成され、すぐれた能力を身につけたのである。日本分析化学会設立の基盤の一つができたのであるともいえる。

製鐵工業においては生産方式・設備・技術・操業などが近代化（大型化・連続化・高速化など）すると相俟つて工業分析試験方法は、科学技術の各分野や現場の経験に至る広い範囲からその粹を取り入れて、たゆまず近代化をはかり進歩発達をなし、工場の中核的機能を果してきた。特に最近は電子工学、電算機の活用により急速に進展し、分析装置、操作、データ処理が自動化され、複雑な分析操作もまた自動化されて、分析室が全自动化され、省力、能率化の実績をあげ、かつ品質の安定、向上がはかられている。ついで工場全般に自動制御が広まり、工場は新らしい姿に変貌し、これに加うるに優秀なパイロット技術者の働きと相俟つて、新らしい時代に入

らんとしている。この様な実力のあるパイロット技術者の養成こそ当面の緊急な課題といえる。

また従来化学分析の対象は専ら元素組成であつたが、これにマトリックスと析出物や介在物などの化合・存在状態別の組成分析、表面状態・内部状態の分析、短寿命化学種の分析、原子価や原子の化合状態、これらの分析のみならずその機能、鋼材やそのある特定の局所、更に進んでその結晶や分子や原子などの構造と欠陥(空孔・転位その他いろいろの大きさの欠陥)の解析等を必要に応じて分析・試験方法を研究開発してきた。今後は益々科学技術の各分野に亘り一層連絡を深め、また鉄鋼生産各工程の作業管理、連続のごとき連続製鋼技術においてはその高速化に伴なうオンライン工程管理を重要な課題として含め、情報科学的の思考や materials characterization の考え方を取り入れ、新らしい一つの分野に展開すべきである。第19委員会創立当時より既に日常現場分析の研究開発に着手していたことに思い至れば当然の帰着といえよう。

第1分科会(分析)は委員や関係者約90名が出席し鉄鋼化学工業分析全般に亘り議題を取り上げ、常に近代化に努めている。最近はその上 ppm や ppb レベルの微量や超微量成分の分野の開拓に取り掛っている。共通していることは、標準試料の作成とその標準値の決定方法である。

微量元素の問題は第19委員会創立の当初より、白点の問題に関連して取り上げられている。また環境分析も微量並びに超微量の代表的な問題である。第19委員会

第1分科会(分析)は昭和45年研究を開始し、工場廃水分析より着手することになった。この問題は物理、化学、生化学、その他の科学技術の各方面に複雑かつ微妙な関係をもち、チーム・ワークにより優秀な業績を挙げるのである。昭和47年に環境分析小委員会が発足します懸濁物質、微量油分や数種の重金属の分析方法を共同実験により検討し、既に第一次原案を得るに至った。汚染に深い関係のある廃水問題は各科学技術の分野に関連する新しい分野である。

分析化学の教育にたずさわっている者にとって、大きな衝撃を与えたのは、先般おきたデータのねつ造事件である。内外にデータの信頼性を失わせたのみならず、森山原子力委員長が原産の牛次大会で、断腸の思いがするといわれたことである。この事件は日本の分析化学に対して大きな恥辱であり痛憤に堪えないところである。この事件によつて思い起すことは、20年前の昭和29年日本分析化学会はじめ、関連学会の化学者が、国立分析化學中央機関を緊急に設立することを政府に要請し、科学技術庁が予算措置も講じたが最終段階で大蔵省主計官の裁断によつて無視されてしまった。わが国の現状から、これほど遺憾なことはない。日本分析化学会会長武内次夫博士は分析化学者としての信念について意見を述べている。すべからく日本の分析化学者は、確固たる信念をもつて常に行動すべきである。

日本鉄鋼協会の皆さん、学振第19委員会に設立以来よせられましたご協力に対し深く感謝いたしております。今後も倍旧のご指導とご援助をお願いいたします。

UDC 543 : 669.1

隨想

鉄鋼分析化学の30余年

後藤秀弘*

今回鉄鋼分析化学の特集号が編集発刊されることとなり，“鉄と鋼”発刊以来最初の企画であり鉄鋼分析に寄与するものとしては大慶に存じます。

私が鉄鋼分析に従事するようになつたのは昭和15年春理学部より金属材料研究所へ転勤した時からである。その頃は機器分析は全くなくもっぱら湿式分析に頼つていた時代であつた。先ず理学部で研究していたオキシンを鉄鋼の実際分析に応用を考え鉄鋼中のAlやその他の金属の定量に利用して金研の分析の改良に当つた。一面その頃の最新鋭のQU24型分光分析器がドイツよりの最後の荷物で到着したのでAl地金などの分析への利用をはかりはじめた。同時にあとで役立つたブルフリッヒの光度計も入荷した。

一方学術振興会第19小委では故俵先生が委員長となられ製鋼の作業をコントロールする迅速分析法を研究する第1分科会を自分で主査されて成果を挙げていられ自分も参加させて貰い数種の迅速分析法を研究し報告した。そのなかでもAsとSiの迅速分析法などは学振法となり、各處で実施された。学振は戦後も継続されて主査は宗宮先生に交替され多数の成果を挙げていられるが、これは宗宮先生が執筆されることと思ふことでは省略する。

戦時中は生産量の増大を要求されていたが原料と人手不足で生産は思う様にならなかつたが分析法の研究は進んでいた。しかし現場分析以外はいわゆる旧JESなる規格法で行われるので時間を要し多数の人手を必要としていた。代表的なY工場へ行つた折もSなど沢山分析するが二日からないと結果が出ないので、何とかならないかと云うことで燃焼法でやるよう指導し、重量法をやめて貰つた事がある。

終戦後一時は鉄鋼の生産がとまり分析室も火の消えた様になつたが、やがて生産が再開されて分析も重要となつた。その頃再びY工場へ行くとSの分析に困つていられるとの話で拝見すると重量法に戻つてはいる始末であつた。古い分析者は新しい方法にすつかり移るに相当

の抵抗があつたようである。そこで工業技術院に行きJESの分析法は古い方法が多く、改めねば生産の向上に間に合はないからと改良を求めた。二三度足を運んだがそのうちすべてのJESを新しきJISに切りかえるからそのせつ分析法も審議することと/or、その時お前も手伝えとのことであつた。これが縁で今日も専門委員会の臨時委員を勤めることになった。

さて鉄鋼の化学分析のJIS原案作成に当り引受けける処がなく最後に鉄連にて吉田さん（現在協会）にお願いして鉄連で引き受け貰つて私も参加して何回も回を重ねて漸く原案が出来て答申を出し専門委員会へ廻る事となつた。以後改訂を重ねて現在に至つている。

私が昭和34年海外を視察に行つた時驚くほど機器分析が活用されていた。歐州の工場ではいまだしの感があつたが米国ではAlの研究所などは各種の機器を揃へて分析していた。発光分光が主であるが結果が計算されてタイプされて出てくるもの、螢光X線も計算されタイプされるものなどが設備されていた。その頃国内で考えていたカントバックより進歩しており、現場工場の分析に取り入れねばならんと考えた。帰國後カントバックの製作をはじめて島津製作所に計算機も工夫開発してカントバックに付属せしめる様に勧告して開発に努力され遂に完成に至つた。他方国内の工場では漸く機器化が必要であることがわかりかけて分光写真器を整備したり購入せんとしている状況で余りにも海外との格差が大きいので私一人声を大にしても駄目と感じ機器分析視察団を組織して海外の状況を見て廻りその活用を知り、国内の工場分析の能率の向上を各社で計画するのが早道と考えた。これまたいろいろと骨を折りはじめ生産性本部の視察団を組織して貰ふ考えでいたがなかなか具体化しないので鉄連主催で団を組織することとなり、鉄鋼大手六社より一人宛代表を出して46年4月欧米に出発した。時あたかも製鋼法も平炉より上吹転炉に転換する折柄とて分析もそれに対応せねばならぬ切実な問題をかかえて

* 東北大学名誉教授 理博

おり全く時機を得たものと思はれた。

複数団は欧米の主なる製鉄工場および鉄鋼研究所を訪ねて見学すると同時に分析の機器化の将来について討議して帰国した。余談であるが或社では分光写真器の設置を計画されていたがこれでは時代おくれだと云うので旅行の途中からその発註を取止めるよう電報を出した団員もおられた。帰國後視察報告書を出したりして国内の鉄鋼分析の機器化に貢献すると同時に非常に早く整備が進んだと確信している。

昭和30年代に入り鉄鋼および鉄鉱石の国際取引きが多くなり国際標準化機構(ISO)により先づ鉄鋼の分析法について ISO TC17/SCIとしてイタリアが幹事国として発足していた。Mn鉱石についてもソ連が幹事国として進めつつあり何れも日本は〇メンバーであるのでPメンバーとして参加して提案や意見を述べるべきだと機会あるごとに進言していたが機が熟し鉄鉱石の分析法について日本が幹事国を引き受け TC102として発足することになった。(後年 TC17も Mn鉱石もPメンバーとして参加することとなつた)。TC102は試料分科会(SC1)と化学分析分科会(SC2)がまづ準備されることとなり SC2は原案を日本でまとめることとなつた。然しJISも当時すでに改めるべきところが多くあり、良い原案を作り JISを改め、それと同時にISOの原案とせねばならんこととなつた。鉄鉱石のみでなく鉄鋼の化学分析法のJISも検討せねばならぬ点が指摘され、また切角機器分析の設備をしたがJIS法にならないと十分に機能を果し得ないなど諸問題が生じた。そこでこれらの当面する諸問題に取り組み早急に解決してJIS法の原案あるいは改正原案を作成する組織が必要となつた。鉄鉱石のISOの事務は鉄連で引受けられて実施に進んだがこれ以上負担をかけ難く、そこで鉄鋼協会に技術研究会があつて各種の部会で研究が盛んに行われているので分析部会を作つて当面する問題を研究解決して頂く様に御願い致すと同時に主要会社の関係者にも協力を要請した。準備会が昭和34年秋に持たれ、当面する問題を迅速に専門分科会を作つて解決して行き解決すればその分科会は解散すると云うことで活発に活動するため小人数で発足することとなり、第1回の部会が持たれたのは昭和35年12月であつた。その時の出席者は20名で鉄鉱石化学分析小委員会、鉄鋼のP分析小委員会、鉄鋼のS分析小委員会がまづ発足することになつた。つづいて自記式発光分光分析小委員会が組織された。初代委員長は八幡製鉄東京研究所の池上副所長が担当され、その後を新日鐵製品技術研究所の池野所長が引き継がれ益々活発に当面する問題の研究、討議が行われている。その活動の様子は

池野委員長が記述されることと思う。私は数年にしてすべての問題が解決されて、今頃は分析部会というものが昔あつたそぞらくの事になるのではないかと思つていたところ、製鉄製鋼技術の進歩とともに各種の問題が提案され委員長、小委員会の主査、各委員の努力協力により難問題を解決され ISOは勿論諸種のJIS原案が作成されたのみならず部会法まで作成されるに至つては此上なき喜びである。鉄鉱石小委員会で作成された原案にもとづき ISO TC102 CS2の原案が作成されて昭和38年春開催された第1回のTC102東京会議に日本の原案が提案されて審議された。頭回を重ねて訂正される処もあつたがおむね日本案が採用されて昭和48年に Fe, 水分, P, Al, 試料採取、処理法が ISO法として認められるに至つた。

以上は国内全体のことであるが私が所属している金研の研究室における主なる研究を少しく回顧してみたい。最初に記述したように戦時中は学振19小委の第1分科会に協力し、迅速分析法の研究を多く行つた。なかでも迅速分析法の最も要求されるC, P, S, Si, Mnの5元素の中でもSiの迅速分析法が困難であつた。脱水された珪酸の容量を測定するとか迅速に重量法を行うなどがあつたが、前者は再現性悪く後者は時間を要した。そこで迅速正確に定量するには容量法が採用できないか研究した結果、柿田博士が中和滴定法を完成された。そして学振法となり製鋼工場と共に珪藻鋼を製造している工場の分析室で實用された。鉄と鋼誌に掲載したが戦後外国の文献をしらべた処外国でも報告があつたが鉄と鋼誌への発表が一年早かつた。何処の国でも同じ様な事が研究されるものと思つた。戦時中問題となつたのは鋼中のビ素であつた。もちろんその除去を研究することが戦時研究として要請されたが同時にその迅速分析法も重要となつた。Asの定量は蒸留によつて分離後等からの方法で定量されていたが蒸留分離に長時間を要し不便な方法であつた。そこで簡易な方法で迅速に分離出来ないかと研究の結果金属Asとして迅速に分離後容量法による方法を柿田博士が完成されて鉄鋼のみならず鉄鉱石に迄広く活用された。

以上は戦時中の大きな思い出であるが、戦後は溶媒抽出分離吸光光度法の研究に進み、それぞれ成果を挙げた。外国にては原子力材料の分析にメチルイソブチルケトン(ヘキソンと略称)が使用されているので鉄の抽出分離が可能でないかと検討の結果、容易に抽出される条件がわかつた。鉄鋼中の微量のAlなどの定量にはそれ迄水銀陰極電解法或はエーテル抽出分離法を使用していたが手数と時間を要し、またエーテルは危険な薬品であ